

パナマとチュニジア

(中南米・中東比較小論の試み)(上)

甲 斐 紀 武

パナマとチュニジアとは訪問したことがない人には、殆ど想像がつかない世界であろう。実際に日本とは全く異なった環境にある国である。

他方、パナマとチュニジアの間には日本との間よりも多くの類似性があると思われる。この両国の間に一般に考えられる以上に共通性があることは、注目に値する。それはまた夫々の背景にある中南米と中東の間にも共通点があるということである。

この小論はパナマとチュニジアを比較することによって、中南米と中東とを較べてみようとする試みであるが、今後は更に一般的な形で両地域の比較推論を進めてみたい。それは同時に日本とこれら地域の今後の係わり方を考える上で参考になると思うのである。

1. パナマは中米に位置するに非ず、チュニジアはアフリカに位置するに非ず

(1) 北米大陸はカナダ、アメリカ合衆国とメキシコを含んでおり(メキシコについては、1990年代にサパティスタの反乱で世界的に有名になった最南端のチアパス州とユカタン半島は、後に述べる中米の一部とする説があ

る)、南米大陸はパナマ以南の地域を指す。北米と南米の間の狭い地峡地帯は中米と呼ばれる。そこにはグアテマラからコスタリカまでの6か国が存在する。従って、パナマは中米ではなく、南米の国に分類される。何故こうなるかと言えば、パナマは1903年の独立まではコロンビアの一部であり、コロンビアは南米の一国であったからである。しかしパナマとコロンビアとの間にはダリエンの広大な熱帯雨林と険しい山岳が横たわり、昔から交通の難所となってきた。今日でもメキシコから延びているパン・アメリカン・ハイウエーはダリエンの密林と山並みに妨げられ、パナマとコロンビアの間は不通である。代替ルートとしては海上輸送しかない。むしろ西のコスタリカとの国境地帯は平坦な平野である。このようにパナマは中米との間でより便利な交通手段を持っているが、パナマは歴史的な経緯を重視し、南米に属するという意識が強い。嘗て筆者がパナマに駐在していた時に日本政府は中米フォーラムをコスタリカで開催したことがある。パナマはこの第一回会議には代表を送ったが、2年目からは参加しなかった。恐らく中米というタイトルに抵抗を感じたのであろうが、最近では中米統合機構



パナマ運河

(SICA) の加盟国になっており、むしろ中米諸国との関係緊密化に積極的であるようだ。このSICA加盟国の中米サミットは今年8月に日本で開催される運びである。

(2) 他方チュニジアは地理的にはアフリカ大陸にあるので、わが国では一般にアフリカの一国と思われ勝ちである。しかし、欧米や国際機関ではアフリカとは専らサハラ砂漠より南に位置するブラック・アフリカ諸国を指し、モーリタニア、モロッコ、アルジェリア、チュニジア、リビアの大西洋、地中海沿いの北アフリカ諸国はマグリブ諸国と呼ばれて区別されている。ここでいうマグリブとはアラビア語で「陽が沈むところ、時間」を意味し、イスラム教徒が一日に行う5回のお祈りのうちの4番目のお祈りを指すものでもある。

マグリブ諸国はモーリタニアを除き全てア

ラブ民族でイスラム教徒であり、22か国(PLOを含む)を加盟国とするアラブ連盟の一員である。チュニジアはこうしてみると中東の一部であり、黒人は全体の5%以下である。エジプトなどのマシュリク(西のマグリブに対し東部の地中海沿岸を意味する)諸国や湾岸諸国との政治的、経済的、社会的な繋がりが強い。

2. 両国共に政治的斡旋の能力に秀でており、国際場裏での存在感が大きい

パナマは日本の北海道の面積に300万人足らずの人口であり、チュニジアは日本の4割の面積に900数十万人が居住する。ともに国家、国民の規模としては世界では小さい方に属する。しかし、その国際的な重みには大き



ポール・エル・カンタウイ (チュニジア)

いものがある。これは夫々が政治的幹旋、周旋の実力を持っているからであろう。

(1) チュニジアは古くはフェニキア、カルタゴの後裔であり、商業的才能と政治的周旋の能力を備えている。チュニジアは現代では中東紛争の一方の当事者であるPLOがベイルートから追い出された時にこれを受け入れ、PLOは1982年から1994年までチュニスに本拠地を置いていた。1992年のマドリッド会議の時にはPLOは国家や団体として国際社会で認知されていなかったのでPLOとしては参加できず、チュニジア政府の傘の下で参加している。また、イスラエルとの間でも2000年9月に第二次インチファダが勃発するまでは相互に利益代表部を設置していた。

チュニジアはその祖先カルタゴの時代に

も、その周旋能力を発揮している。紀元前2世紀の第二次ポエニ戦争（フランス語ではla Deuxième Guerre Puniqueと呼び、puniqueには蔑視の意味があるとする意見もあるが）では当初ハンニバル将軍が指揮するカルタゴ軍はアルプスを越えロンバルディア平原に降り、イタリア半島を席卷する勢いであった。その軍はローマに迫り、元老院は占領を恐れて一大パニックに陥ったと伝えられている。しかし、ハンニバルは無用の殺戮を避けるべくローマに向かわず、むしろローマを迂回して現在のナポリ近郊のカプアに向かった。これはハンニバルの現実感覚を示すものである。ハンニバルの戦闘は出来るだけ双方の犠牲を少なくして連帯と平和とを求めるものであったので、一種の世界主義でもあった。

このハンニバルの世界主義の考え方は今日

ではチュニジア政府に受け継がれ、東京を始め世界の幾つかの首都には交流・教養サロンとして「ハンニバルクラブ」が置かれ、活発な活動を行っている。東京には世界でも2番目に設置され、森前総理が会長であり、筆者も会員の一人である。さてカプアに落ち着いたハンニバルは残念なことにイタリア式の歓楽に耽り過ぎ、その後のカルタゴの敗戦と滅亡を招く大きな原因となった。

(2) パナマもその周旋の能力を発揮してきた。古くはアルゼンチンのペロン大統領、エバ・ペロンに次いで彼の二番目の夫人で後にアルゼンチン大統領となったイサベル、イランのシャー（1979年12月から約3か月パナマに滞在した）などの政治的亡命者を受け入れてきた。特に、イランのシャーを受け入れた当初はパナマの実力者トリホス将軍や当時のロヨ大統領は屢シャーと歓談する機会を設けたりしてもてなしたが、ホメイニのイラン政府が激しく引き渡しを迫ってきたので、パナマ政府としては極めて苦しい対応を迫られたという。真偽のほどは分からないが、シャーとその家族に対する扱いが次第に簡素化されてきたという。結局イラン政府からの正式な引き渡し要求が出される24時間前にシャーはパナマを去った。こうして1979年1月に始まったシャーのオディセイア（odyssey）は終焉の地となったエジプトで1980年7月に終わるのである。なお同じ中南米ではメキシコも伝統的に外国の政治亡命者を受け入れており、例えばレオン・トロツッキーもその一例である。

更にパナマは1999年12月31日に米国から運河を取り戻し、同時に全ての米軍兵士もパナ

マから引き上げた。そもそも運河はパナマ国土の真ん中を通っており、運河兩岸の夫々5マイルほどの土地は運河地帯とされ、恰も米国の領土であった。これに加え運河防衛のためとして米軍の南方軍司令部が置かれ部隊が駐屯していた。これはナショナリズムに燃えるパナマ国民にとっては我慢のならないことであり、1977年の運河返還条約締結後も燦り続けていた。この運河条約締結に当ってはトリホス将軍はパナマだけでは限界があるとして、中南米諸国や国際世論を活用した。米国はいわば国際世論に圧倒されて、運河返還に同意せざるを得なかったのである。これは沖縄返還と並ぶ一大快挙である。あたかも旧約聖書に出てくるダビデと巨人ゴリアテの戦いを彷彿とさせるものがある。なお、ダビデは投石器を使って石をぶっつけてゴリアテを倒したのだが、石でもって人を攻撃したり、傷つけたりする行為は新約聖書には屢出てくる。キリストの昔からパレスチナでは石が人間関係において重要な役割を演じていたようである。今日でも第一次、二次のインチファダやイスラエル軍との戦いにおいて武器を持たないパレスチナ人にとっては石を投げつけることが唯一の抵抗のようであった。正に石とパレスチナの結びつきは2000年を越えてなおも継続しているのである。

パナマの実力者トリホス将軍の頭には、この運河問題のみならず全ての場合で米国とは対等な立場で接するという決意があったようである。一つの例として、或る時米軍はパナマで落下傘による降下訓練を行うこととし、その許可を求めてきた。これに対して将軍は同じ日にパナマ軍が米国内（カンザス州）で降下訓練を行うことを条件に許可を与えたと

いう。同じ日にパナマと米国で落下傘による降下訓練が実施されたことは言うまでもない。

3. 宗教上や文化的にはスペインを仲介として類似点が多い

(1) パナマの宗教はカトリックであり、チュニジアはイスラム教であるが、パナマの旧宗主国たるスペインは8世紀から15世紀までイスラム勢力によって支配されていた。この意味でパナマにはスペインをブリッジとしてイスラムの影響が及んでいる。またイスラム教はキリスト教、ユダヤ教と同根である。仏教とイスラム教、キリスト教の距離よりは、後2者間の距離の方が遥かに短い。厳しい父親のような神、厳格な一神教、神の前での平等などは旧約聖書に関する限り3者に共通である。しかしイスラム教ではキリストを預言者の一人とは認めるが、神の子とは認めない。イスラム教は当初はむしろユダヤ教から多くを取り入れている。

(2) パナマはスペインのコンキスタドール(征服者)の一人であるバルボア等によって16世紀に建設が始まったが、スペインはイスラム勢力から領土を解放したばかりでいわばイスラム文化に濃厚に染められており、そのスペイン人が16世紀半ばに建設したパナマには、間接的にはイスラムの影響が強く残っている筈である。これはパナマに限らないが、中庭(patio)を持つ建築様式はイスラム建築に由来するのであろう。イスラム教は偶像を禁止しているので、絵画、彫刻よりもデザイン、建築に重点があり、特にモザイク文様などには見るべきものが多い。人名にも Omar

というのがパナマ人の中に見られるが、これは明らかにアラブ系である。世界中でもスペインのように800年近くも自分よりも高度な文明を有する外国勢力によって支配されていた国は殆どない。1492年に陥落したイスラム勢力最後の拠点であるグラナダには今もイスラムの影響が顕著に感じられるが、我々がパナマや中南米諸国を観察すると、やや同じ錯覚に陥るのである。序に言えば1492年のグラナダ陥落によってイスラム勢力がヨーロッパから撤退を余儀なくされたことは、1948年にイスラエルがパレスチナの犠牲において独立を達成したことに同じくアラブ人にとっては大いなる歴史的屈辱であったようだ。

パナマは多様な民族から成り立っている。スペイン人、インディオ、この両者の混血のメスティソ、現地生まれのスペイン人(クリオーリョ)、インディオと黒人の混血であるムラート、黒人である。このようにして成立した文化はパナマ、南米独特である。土着のインディオとスペイン人の風俗、習慣が交じり合っている雰囲気はイベロ・アメリカ的である。

(3) チュニジアも後に述べるように歴史の十字路に位置し、土着のベルベル人の上にフェニキア人、アラブ人、トルコ人、フランス人、イタリア人などが積み重なっている。同時に多くの異なった文化がチュニジアを通過している。この過程で生まれた特にマルーフと呼ばれる音楽は、アラブの楽器で演奏され、旋律はアラブ音楽、チュニジア音楽とスペイン南部アンダルシア地方の音楽とのいわば混血である。一見東洋風の感じさえ受けるのである。

4. 両国共に歴史、交易の十字路に位置してきた

(1) パナマは北米、南米大陸を結ぶパナマ地峡にある。この地峡は最も狭い所では直線で50キロもない。運河はその一番狭い場所に建設されたが、もとより直線とは行かないので全長は80キロになっている。16世紀の初めにパナマ地峡を縦断して太平洋（当時は「南の海」と呼ばれていた）の第一の発見者としての栄誉を得たバルボアはインディオの酋長の協力を得たが、縦断した場所はコロンビア寄りのグリエン地方であつたらしい。彼の名前は現在のパナマの通貨に残っている。パナマの通貨の単位はバルボアというが、実際は硬貨を除くと紙幣は米ドルと同じである。バルボアの偉業の後、16世紀半ばに当時のスペインのカルロス5世はこの地峡に太平洋と大西洋とを結ぶ運河を建設することについて調査を命じたと伝えられている。事実パナマ地峡はペルーの黄金やボリビアの銀やその他の太平洋岸の南米の物産をスペインやヨーロッパに運ぶ唯一のルートになったのである。これらの物産は太平洋に面しているパナマ市に陸揚げされ、馬などに積まれて地峡を北に向けて縦断し、大西洋側のコロン（コロンブスが第四回の航海の時に休息したりモン湾の奥にあるので名づけられたコロンブスのスペイン語名）からヨーロッパに船で運ばれたのである。近代になり米国人の西進に伴い、ゴールドラッシュでカリフォルニアの重要性が高まると、米国東部・パナマ・カリフォルニア・ルートが脚光を浴び、19世紀半ばにパナマ市とコロンを結ぶパナマ鉄道が開通すること

になる。

(2) チュニジアは紀元前10世紀にフェニキア人が移住してきたのが起源であるとされる。このフェニキア人は地中海に勢力を伸ばし交易を奨励すると共に、ジブラルタル（当時は「ヘラクレスの柱」と呼ばれていた）を越えて遠くアフリカ西岸—今日のセネガル川あたり—まで航海をしたと伝えられている。

この過程でフェニキア人はベルベル人などの土着の民族とも混血し、カルタゴ人としてのアイデンティティを明確にして行ったと思われる。このカルタゴ人は紀元前5、4世紀には繁栄の絶頂期を迎えたが、地中海の覇権を巡って当時興隆中のローマとの衝突は避けられない情勢であった。この結果は第一次、第二次ポエニ戦争に発展する。

ポエニ戦争はわが国でも有名で、ハンニバルの活躍が特に知られているが、同じカルタゴの將軍ではアスドゥルバルも有名であり、チュニジア最大のリゾート地ハマメットには世界最大の1,540平方メートルの面積のスイートルームを持つアスドゥルバルホテルがある。ハンニバルの父親はアミルカールといい、日本が供与した漁業調査、練習船にはハンニバルと並んでアミルカールという名前がついている。

ハンニバルは多数の象の部隊を率いてアルプスを北から南へと越えてイタリアに攻め込んだが、この象の一群はカルタゴから筏で地中海を横断しスペインに上陸したと伝えられる。

カルタゴという地名は広く欧米、中南米に分布しており、スペインやコロンビアではカルタヘナ（Cartagena）がそうであり、フラ

ンスと米国ではカルタージュ (Carthage) と呼ぶ地名である。恐らく世界中でこの地名がないのはアジアくらいであろうか。

カルタゴが紀元前2世紀末に滅亡した後は、ローマ帝国の支配下に入り、特にカトリックの一大司教区が置かれた。その司教の一人であるキプリアヌスは司教の地位の向上に努めたといわれる。また、同じカルタゴの聖アウグスチヌスは「神の国」を著して有名である。この大司教区は初期のキリスト教の歴史には屡登場するが、教義の解釈などでかなりの影響力を保持していた。その後は7世紀にイスラム勢力の進攻があり、バグダッドのアッバース王朝の弱体化に伴って10、11世紀にはチュニジアにも相次いで二つのイスラム系王朝が誕生している。この間には方角が違ふ感じで

あるが、フランスの聖ルイ (ルイ9世) 王の十字軍がチュニジアを襲い、ルイ王はチュニスで亡くなっている。ルイ王は慈悲深く、社会救済活動に熱意を持っていたといわれるが、その名残はパリのセーヌ川のサン・ルイ島として、また同島のチャペルの素晴らしいステンドグラスとして残っている。

チュニジアはその後16世紀頃からオスマントルコの治世下に入り、19世紀後半にはフランスの保護領となり、第二次大戦を経て1956年に独立を達成した。誠に歴史、文化の十字路に位置するに相応しい目まぐるしい変遷である。

(かい・のりたけ 日本・パナマ友好協会会長代行、
日本・チュニジア友好協会会長)

[新刊資料のご案内]

中南米諸国便覧 2005年版

定 価 : 3,150円 (税込み)、送料 290円

(会員割引 : 2,520円 (税込み)、送料 290円)

主な内容

第1部 中南米概観

主要指標、地勢・言語、民主化への歩みと諸問題、地域機構、資源・産業、経済関連指標、インフラ関連指標、社会関連指標

第2部 各国別概観

第3部 我が国と中南米との関係

パナマとチュニジア

(中南米・中東比較小論の試み)(下)

甲 斐 紀 武

5. 中国、台湾との関係

この点の対応は両国では異なっている。

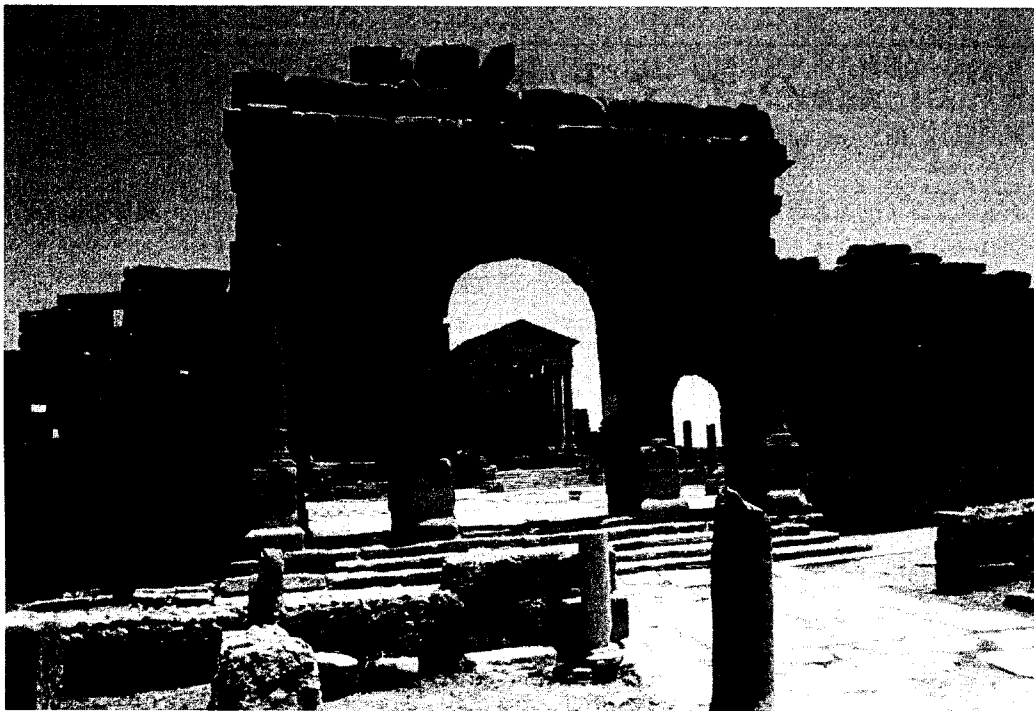
(1) パナマは従来台湾を承認し、相互に大使館を設置している。その他の中米諸国も同様である。世界でこの地域だけが台湾の存在が大きい地域となっている。パナマ自体所謂華僑ではないが、中国系のパナマ人が約10万人いると言われる。パナマの人口が300万未満であるので、3%以上を占めている。政府部内や政治家、企業の経営主などに良く中国系と思われる名前を見出すことがある。彼らの殆ど100%近くは中国語が話せない。スペイン語又は英語である。彼らの祖先は19世紀半ばのパナマ鉄道建設に際し、清朝末期の広東省など中国南部からパナマに渡ってきたものである。鉄道が完成した後はパナマに残留する者以外は他の中米に移住している。今でも中国系パナマ人の一部は中華料理店を経営しており、パナマでは美味しく、安い中華料理を味わうことが出来る。

1997年9月にパナマ政府はその3年後に返還される運河の運営などについて国際会議を開いたが、この会議には台湾から李登輝総統

が出席し、筆者は日本の政府関係者としては稀な李総統と握手する機会を得た。また2002年4月にはチュニスで公式訪問の当時の中国の国家主席江沢民氏と握手をする機会があったので、中国、台湾双方の元首と握手する光栄を得た次第である。

他方、中国はパナマには大使館はないが、これに代わり通商代表部を筆者が在勤中に設置した。初代の所長が着任したが、この人は在ペルー大使館の参事官をしていた人で中国外務省の役人である。数名の代表部員も全員が外務省出身である。パナマ政府はウイーン条約による外交特権を事実上中国代表部に与えていたようである。筆者の経験からみて世界の何処へ行っても同じであったが、中国政府は外交官の専門の言葉を重視し、専門とする言葉以外のポストには異動させない原則を持っているようである。中南米の場合も筆者がメキシコで付き合っていた中国大使館公使や上記パナマの中国通商代表部所長は共にスペイン語は抜群に上手かった記憶がある。本人たちはキューバで研修したと言っていた。

パナマが台湾を承認し、中国とは通商関係を保っていることは、双方から利益を引き出すことが出来て、賢明な方策と言えよう。し



スベイトラ遺跡（チュニジア）

かし、世界の情勢から見てこれが今後どれ位続くかは不確定要素である。

（2）チュニジアはこれに対し台湾とは一切の関係がない。永年中国と正式な外交関係を維持しているが、そもそも中国のチュニジアにおける存在は現在までは希薄である。第一所謂華僑が全くいない。世界の首都の中で華僑やそれに類似した存在が零という土地は先ずないと思う。従って、チャイナ・タウンがない。もとより中国との合弁企業もない。中華料理屋もシンガポール系とあと1軒しかなく、味は不味く、値段が高い。招待には殆ど使えない。中国人の存在がないのは、チュニジア政府が熟練労働者と雖も外国人の入国を厳しく制限している結果でもあろう。味の話を続けると、日本料理もチュニジアでは人気

がない。20数年前に一軒あったが、客が少なく長持ちしなかったという。在る時外務大臣の紹介として、日本料理屋をチュニスで開きたいというチュニジア人が筆者に会いにきたが、筆者は理由を上げてこれをディスカレッジしたことがある。パナマでは美味しく、安価な中華料理、日本料理が食べられたが、チュニジアでは状況は全く逆である。これはパナマ人が味についてはコスモポリタンであるのに対し、チュニジア人は味には保守的で、自国の伝統ある食事を変えないというところにあるのではないか。またチュニジアがクスクス（小麦を細かに砕いて、野菜、魚、羊の肉と蒸して食べる）を主食とする食文化圏にあり、同じ北アフリカでも米を良く食べるエジプト、リビアなどと異なっていることも理由の一つであろう。



パナマの民族衣装

中国はこのようにチュニジアでは影が薄かったが、次第にチュニジア重視の方向を打ち出しており、大使館のスタッフを充実させると共に、2002年4月には江沢民主席が国賓として訪問し、具体的な協力につき話し合っている。

6. 両国共に外国との紛争、動乱を経験してきた

(1) パナマは1903年にコロンビアから独立したが、この時はそれ程の武力衝突などはなかったようだ。その一つの理由は先に述べたコロンビアとの国境が険しい山岳と熱帯雨林地帯であり、容易に軍隊の移動が出来ない事情が上げられる。パナマが大きな動乱を経験するのは、1989年のアメリカ軍の進攻である。

米国は当時のパナマの事実上の元首、実力者であるノリエガ將軍を米国への麻薬密輸、マネーロンダリング容疑で訴追しており、その害が目に見え余るとしてノリエガを逮捕すべくパナマに進攻したと言われる。パナマに侵攻するといっても米国は運河沿いに基地を有していたので、本国からの増強部隊をこの基地に送りこみ、そこから隣接のパナマ市を攻撃させたのである。しかし、この行為が他国の領土の侵犯に当たることは疑いがない。当時パナマ国内では汚職、弾圧などで末期的症状を呈していたノリエガ政権への反対には激しいものがあり、特にポスト・ノリエガで大統領になる反対党のエンダラ氏はその指導者であった。米軍侵攻の少し前にエンダラ氏他の野党の指導者は米軍基地に避難し臨時政府を組織し、そこから米州機構(OAS)事務局長宛

にFAXでパナマ国内の事態收拾のために外国軍（米軍）の介入を要請する文書を送った。しかし、この文書はパナマに本部を置く米南方軍のレターヘッドを使ったので、カラクリがばれたと戦後噂されたという。この米国の侵略行為はパナマの民主主義を守る上からは必要かも知れないが、国際法的には明らかに違法である。これに対する中南米諸国の反応には二律背反的なニュアンスが見られたようである。いずれにせよこの米軍の行動は最近の米国のイラク攻撃と考え方を同じくするところがあると考えられる。

米軍が攻めてきたのでノリエガはパナマ市内の数箇所に避難したが、最後には法王庁大使館に保護を求めて逃げ込んだ。法王庁大使館は日本大使公邸と同じ地区にある。しかし流石のノリエガも米軍の圧力に持ちこたえられず、数日後には米軍に降服したという。筆者は法王庁大使館でノリエガが数日を不安な気持ちで過ごした部屋を見たが、ベッドの壁にキリストの十字架の木彫りがかかっているだけの質素なもので、豪勢を極めたノリエガには相応しくない佇まいであった。

（2）チュニジアは1956年にフランスの保護領から独立した。保護領の時はベイという称号のいわばサルタンに相当する人物が歴代統治し、一種の王政に似ていた。独立は独立後に大統領になるブルギバ氏（当時の第三世界の穏健派の指導者として知られている）によって指導され、概ね平穩に推移したと言われている。フランス領土の一部であった隣のアルジェリアは数年に及ぶ流血と多数の犠牲者を出して独立を果たした。これと較べればチュニジアの場合は静かで、独立劇は国際的に

余り注目を惹いていない。しかし、チュニジア在住のフランス人の中にはチュニジアを去ることに反対の者もあり、特にチュニジア北部ではチュニジア人とフランス人の間で激しい戦闘が展開されたようである。チュニジア北部に地中海に面するビゼルトという美しい港町があるが、最後までフランス人がいたところで、町の雰囲気は南フランスや南イタリアをそっくり移してきたようである。フランス人が最後まで頑張っていたことが良く理解出来るが、その郊外にはフランスとの戦闘で亡くなった殉国者の墓地が残っている。

話は逆になったが、第二次世界大戦でもチュニジアは戦場になっている。ロンメル将軍がエル・アラメインで敗退しドイツ軍がチュニジアに撤退した折、追撃してきた連合軍との間に局地的であるが激しい戦闘が展開されている。現にチュニス郊外には米軍、英国軍の無名戦士の墓地があり、丁寧に管理され、記念日には外交団を招いて式典が開催される。ロンメル将軍がチュニスでの本拠としたのが、今の中国大使館と公邸であり、後に連合軍のモントゴメリー将軍は自己の宿舎として接収したと伝えられている。

チュニジアには1992年から1994年までにPLOが本部を置いていたが、この時代にはイスラエルがPLO本部を空爆したことがあるようだ。また、イスラエルの特殊部隊が海岸からチュニスに侵入し、当時アラファトに次ぐNo2を殺害している。この部隊はカルタゴの大統領官邸と日本大使公邸の間の海岸から侵入し、市内数キロを通過したと言われる。今でも大統領官邸の海岸には監視艇が常駐している。

7. 両国に対する日本の関心事

2004年は日本とパナマの国交樹立100周年であり、2006年は日本とチュニジアの国交樹立50周年に当たる。

(1) 日本のパナマにとっての最大の関心事は運河である。若し運河がなかったら、両国関係は全く別のものとなっていただろう。運河を通航する船舶が積載する貨物のトン数で較べると米国がトップで、次いで中国、日本の順となる。以前日本は2番目であったので、その地位は若干低下しているが、むしろ最近の中国経済ブームで中国向け、中国発の貨物量が増えているためであろう。東アジアやASEAN諸国と米国、EUとの間の貿易が伸びれば、運河利用国としてアジアの比重が増大するであろう。

パナマはまた便宜置籍船の国として知られている。世界中の船舶の18%がパナマ船籍であり、これは世界一である。そしてそのうちの40%が日本の船会社の所有といわれる。日本の船舶全体の65%がパナマ船籍で運航されており、日本はパナマの便宜置籍船制度の第一の利用国である。この制度のお陰で日本のパナマとの貿易額は日本の輸出が6,321億円で同じく輸入が123億円（ともに2003年）であり、輸出では対中南米貿易のトップにあるが、輸出の9割以上が便宜置籍船関係である。従って輸出額が大きいといってもそれは書類の上での話しであり、実際にそれだけの資金が動いているのではない。また、残りについてもあとに述べる保税地域向けが大部分を占める。

運河を活用する施策として、パナマ政府は

運河の大西洋側の町コロンに、一大保税地域を設置している。これは先ず大規模な保税倉庫の形をとっており、世界中からの商品がストックされ、主として中南米に再輸出されている。このうちで幾分かの商品を直接卸売りにかけているのが俗にフリーゾーンと呼ばれる区画である。このゾーン内には約1,000軒の店があり、それこそ世界中からのあらゆる商品が売られている。わが国の数社の大手エレクトロニクスメーカはこの一大保税倉庫の大口利用者であり、同時にフリーゾーンとも密接な関係を持っている。

パナマはその有利な税制で中南米における一大金融センターであったが、最近では金融規制の強化とマネーロンダリングの取り締まりのため、やや活動が低調であるといわれる。嘗ては100を越えた銀行数が現在では77に減少している。事実最盛期には10行もあった邦銀の支店は現在では零となっている。

(2) チュニジアには運河に相当するものはない。わが国のチュニジアに対する関心は、先ず政治面にある。チュニジアは北アフリカ中央部に位置し、シシリー島とサルジニア島とは直線で150キロ足らずの距離にある。現に地中海世界では「5プラス5」という首脳会議が開かれている。最初の「5」は地中海の南のチュニジア、モロッコなど、後の「5」はフランス、イタリア、スペイン、ポルトガルなどであり、欧州とはこのように地中海を隔てて繋がっている。歴史的にもチュニジアは地中海世界の一員であることを強調してきた。次にチュニジアはアラブ諸国の一員として、中東問題やイラク、イラン問題にも積極的に関わり合ってきた。更にチュニジアはア

フリカの一国として、ブラック・アフリカ諸国の経済、社会発展に緊密に協力してきた。チュニジアにはこのような三つの顔がある。地中海世界、アラブ、アフリカという顔はチュニジア外交をより多様化しており、わが国はチュニジアを通してこれら地域との外交を一層活性化することが出来るのである。この意味もありわが国は数年前からチュニジアを円借款年次供与国に指定し、毎年借款を供与し、チュニジアの経済、社会インフラの整備に貢献し、チュニジア官民から感謝されてきた。チュニジアが実際に感謝してくれている具体的な証拠として、次の話を披露することが出来る。筆者の在勤中に或る案件で日本と或る国が各国からの支持を争ったことがある。チュニジア外務省に是非この件では日本を支持して欲しいと申し入れたところ、「日本からは日頃援助などで大変お世話になっている、本件自体いずれの側にも言い分があり判定し兼ねるが、日本からは大変お世話になっているので、日本を支持したい」との答えが返ってきた。これは恰も中国の春秋戦国の昔、呉の国の話で伍子胥に対し壮士である專諸が答えたのと同じ気持ちから出た言葉である。余り極端でも良くないし、一般化は出来ないが、「日頃お世話になっているので、困っている時にはお役に立ちたい」との気持ちが既にチュニジア政府に芽生えているのを看取して、わが国の援助が両国の絆として機能していることを確認出来たのである。

8. レセップスーパナマとチュニジアの架け橋

筆者はパナマのあとにチュニジアに勤務し

た。パナマ運河建設を試みたレセップスはフランス外交官であったので、フランス保護領であったチュニジアとも何らかの絆があるかと思って、何人かのチュニジア人にレセップスのことを聞いてみた。うち多数派はレセップスはチュニジアに居たことはないという答えであった。それでも少数派は彼は確かにチュニスで父親と一緒に生活していた筈だとの答えを齎してくれた。レセップスがチュニスで在勤したことが事実であることを期待しつつ、それ以上の成果はチュニジアでは得られなかった。しかし、つい最近日本・パナマ友好協会設立に際して幾つかの文献を読んでいたところ、レセップスは確かにチュニスで在勤したという記述に出くわした。それを総合するとレセップスは彼が20歳の時の1825年から1832年まで *élève-consul*、即ち、領事研修生として同じ外交官の父親と共にチュニスで勤務したようである。彼はもとより技術者ではなく、レセップス家はフランス外交界において有力な立場を占めていたらしい。レセップスがチュニジア在勤中に運河建設に関心を持っていたかどうかは不明であるが、次のエジプト在勤中にその関心を持ったことは確実なようである。エジプト在勤中にサン・シモン学派関係者に接して初めて心の中に運河建設が芽生えたと伝えられる。サン・シモン学派とはサン・シモン伯爵と呼ばれたドゥ・ルヴロワにより創設された団体である。貧困や戦争という不幸から脱し人類の幸福を実現する為には今でいう経済、社会インフラを充実すべしとの主張で、運河についてはスエズとパナマに運河を建設することを強調している。レセップスはこの考えに強く影響されたようで、かれが唱えていた「人類の幸福のために」

(pour le bien de l'humanité) との哲学はここに起源を持つものであろう。また、彼の哲学についてヴィクトル・ユーゴーは「レセップスは戦争なしでしか得られない最大の行いによって世界を驚かせている」と評している。

レセップスはエジプトでは国王の協力もあり、極めて恵まれた条件の下で仕事をやり遂げ、スエズ運河は約10年の工事を経て1869年11月17日に完成した。なお、運河の完成記念にヴェルディのオペラ「アイダ」がカイロのオペラ座で上演されたとする意見があるが、これは正しくないようだ。確かに運河は完成したが、「アイダ」の脚本の作成が遅れ、実際に上演されたのは運河開通の2年後であったらしい。

レセップスは1880年からパナマ運河建設に取り組んだ。パナマ地峡はスエズとは地形的にも、自然的にも全く異なっており、全体が厳しい環境にあり、当初から完成を危ぶみ、レセップスに思い留まるように意見をした人々がいたが、彼の子息のシャルルでさえそのうちの一人であった。しかし、レセップスは既に74歳であったが、あくまでも果敢な挑戦の精神で難しい事業に取り組んだのである。彼は「既に勝利を得た将軍が2回目の戦いも勝利が確実であるのに、これを放棄することは有り得ない」との強い成功への確信を持っていたようだ。パナマ運河建設事業はスエズと同じレセップスの個人の事業であり、資金集めはすべて彼の手による。工事は当初から難航したが、特に暴れ川と呼ばれたチャグレス川を如何にコントロールするか、クレブラと呼ばれる丘陵地帯を如何に掘り下げるかが難しい技術上の問題であった他に、資金不足、マラリアと黄熱病による犠牲者の増加と

いう難問に直面した。最初は海面式運河を目指したレセップスは計画を途中で変更し、1887年からは閘門式運河建設を目指したが、最終的には資金不足がフランス本国における大疑獄事件へと発展し、1889年には工事は中断された。レセップス自身もこの事件に巻き込まれ、有罪判決を受けた。彼は80歳以上の高齢であったので、収監は免れ、彼に代わって子息のシャルルが刑に服している。しかしこの事件と雖も、彼に与えられていた「偉大なフランス人」(Le Grand Français) という名誉ある綽名を消し去ることは出来なかった。フランス人は今でも人類のために貢献した彼に尊敬の念を有している。

彼が始めたパナマ運河建設工事は米国の下で1904年から10年を経て1914年に完成され、太平洋と大西洋が一つに結ばれた。「the Land divided, the World united」と言われる。

レセップスのパナマ運河建設は40%まで進んでいたのに途中で止めたのは惜しいというのが、後に調査した米国調査団の印象であったという。確かにフランス政府が乗り出し、資金不足を手当てしたならば運河はレセップスの手で完成し、彼も幸福な晩年を送ったかも知れない。しかし、当時のフランス政府は米国が唱えたモンロー主義に遠慮して、米大陸のことには関わりたくなかったようである。

パナマ政府はレセップスが失敗はしたものの、16世紀のカルロス5世の夢を一步現実になづけてくれた恩人として、パナマ市の旧市街のフランス大使館近くの海岸にレセップスと協力者たちの胸像を建設し、その栄誉を称えている。

筆者としては今後はレセップスのチュニス

在勤をもう少し詳しく掘り下げて、彼とパナマの繋がりを更に深めてみたい。

参考文献

1. America's Triumph: by Ralph E. Avery
2. The Path between the Seas: by David McCullough
3. Les Grandes Decouvertes: d'Aléxandre à Magellan: by Jean Favier
4. パナマ運河: 山口 廣次
5. その他



(かい・のりたけ 日本・パナマ友好協会会長代行、日本・チュニジア友好協会会長)

[新刊資料のご案内]

中南米諸国便覧 2005年版

定 価 : 3,150円 (税込み)、送料 290円
(会員割引 : 2,520円 (税込み)、送料 290円)

主な内容

第1部 中南米概観

主要指標、地勢・言語、民主化への歩みと諸問題、地域機構、資源・産業、経済関連指標、インフラ関連指標、社会関連指標

第2部 各国別概観

第3部 我が国と中南米との関係